

トマス・アクィナスの「祈り」概念

山口 隆 介

序

『神学綱要』は、日本ではこれまであまり研究されることのなかった著作である。設問と議論は『神学大全』の諸項およびそこでの議論と対応するものも多い。しかしながら、『神学綱要』は単なる『神学大全』の要約ではない。トマスは『神学綱要』を、信仰 *fides* 論、希望 *spes* 論、愛徳 *caritas* 論から成る3部構成の著作として企図した。これに明確な意図があることは、『神学綱要』第1部冒頭でトマス自身が明らかにしている。

「我々は最初に信仰を、次いで希望を、3番目に愛徳を扱うことにしよう。この順序で使徒〔パウロ〕も語っていたからであり、正しく考えればこう〔この順序に〕ならざるを得ないからである。すなわち、正しい愛徳が可能であるには、希望の然るべき目的が希望によって立てられなければならない、さらにこれ〔希望の然るべき目的が立てられること〕は、真理を知ることなしには可能でない」¹⁾。

そして、信仰に関しては信仰箇条、希望に関しては主の祈り *Oratio Dominica*、愛徳に関しては愛の掟を議論の素材として取り上げるが、それはトマスがこれらを、キリスト自らが、何を信じ、望み、誰を愛すべきかを短くまとめて人間に示したものであると解しているからである²⁾。

そしてトマスはこうも言っている。「……使徒〔パウロ〕は……この世の生の完成はすべて信仰と希望と愛徳のうちに、すなわち我々の救いを要約したある種の箇条と言えもののうちにあると教える時、こう言ったのだ。「今は信仰、希望、愛徳が続く」と」³⁾。

註 (テキストは『神学大全』をST、『神学綱要』をCTと略記した。また参考文献名は「著者名 (発行年)」という形式で提示した)

1) CT, I, c. 1.

2) Cf. *ibid.*

したがってトマスは信仰、希望、愛徳のうち人間への救い、この世の生の完成があり、それを論じるためにキリストがこれら三対神徳について示した人間向けのことば⁴⁾を註釈するという意図をもって、この『神学綱要』の執筆に当たっていると認められる。これは明確に『神学大全』と異なる態度での神学への取り組みである。

本稿は『神学大全』における祈りに関する議論と『神学綱要』における祈りに関する議論とを併せ読むことで、「祈り」を立体的に捉えなおすことを企図している。Torrell (2011) は『神学大全』では祈りについての問題が最も長い問題であると指摘し、かつ、祈りについての議論は『神学綱要』が最も進んでいると評する⁵⁾。『神学綱要』中の「祈り」あるいは「祈る」という語の用例の多くはわずか10章足らずの第2部希望論に集中しているので、『神学大全』第2部の2第83問題「祈りについて」と『神学綱要』第2部希望論とを併せ読むことになる。

第1章では『神学大全』に基づき、トマス・アクィナスが論じている祈りの具体像を探る。その過程で祈りと愛徳との関係、および祈りの身体性を見直す。

第2章では『神学大全』に基づき、祈りと敬神との関係を論じ、人間は神に対し、祈りを通して人間が従属する関係にあることを概観する。

第1章と第2章とは『神学大全』による、いわば従来から認知されていた祈り像に再度光をあてたものである。

第3章では祈りが希望の徳とともに語られている『神学綱要』第2部における、主の祈りの解釈から、祈りにおける上昇的な自己変容への志向が浮き上がってくるのを見出すを試みる。

また『神学綱要』は執筆時期に関して説が分かれている著作であるが、祈り論に注目した場合の見通し、ならびに両著作での祈り論の相違と両著作の構造の相違との関連についての見通しを最後に述べる。筆者は本稿での議論がこれらの見通しの傍証となることも企図している。

最終的には、『神学大全』における祈り論では無視されてはいないものの注目されにくい側面を呼び戻した、立体的な祈りの理解をもたらすことが本稿の目的である。

3) Ibid.

4) Cf. ibid. またこの個所でトマスは神が人間向けに短くまとめて教えたことを、神が自分の大いさにこだわらずへりくだった謙遜とつなげて理解している。

5) Cf. Torrell (2011), p. 70.

第1章 祈りの具体像

祈りには、神に対して自分の願いを念じ、あるいは言葉にして語りかけるといふ個別具体的な行為として捉えられる面がある⁶⁾。その一方で、例えば「生活のすべてが祈りである」、「心の中に絶えず祈りがあり、何をしてもそれが祈りになっている」といふような生活ないし人生の根本態度、あらゆる行為の背後にある根本的な心のはたらきとしての捉え方もある⁷⁾。

もろもろの行為、もろもろの徳のわざの根底にあると考えられるのは、愛徳である⁸⁾。すなわち、人間のすべての徳は、人間自身のため、人間の生きている世界のためというように自閉しては徳として完成せず、神への愛によって、神へと向けられていなければならない⁹⁾。

祈りにおいても、愛徳が根底にあるのは明らかである。「祈りの原因は愛徳の希求であり¹⁰⁾、「この〔愛徳の〕希求の徳は、愛徳のゆえに我らがなすすべてのことのうちに留まってある」¹¹⁾。以上のことを論じている個所で、トマスはアウグスティヌスの言葉を引用する。「まさに信仰、希望、そして愛徳のうちで持続する希求によって我らは常に祈る」¹²⁾。これは、あらゆる行為の背後にある根本的な心のはたらきとしての祈りである。

しかしながらトマスはこの言葉に続けて次のように言う。「しかるに祈りそのものをそれ自体で考えるなら、不断のものであることはできない」¹³⁾。この不断のものであることはできないとされている祈りは、まぎれもなく個別具体的な行為としての祈りであり、そしてこれが、「祈りそのものをそれ自体で考え」たものと位置付けられている。

『神学大全』第2部の2第83問題「祈りについて」で、まずトマスは、祈りが欲求によるはたらきなのか、すなわち何かを欲するということが神に願うという行為の本体なのか、それとも神に願うという行為は理性によるはたらきなのかを論じる¹⁴⁾。

6) Cf. 奥村 (1975), pp. 42-43.

7) Cf. 奥村 (1975), p. 91; p. 95.

8) Cf. ST, II-II, q. 23, a. 8.

9) Cf. *ibid.*

10) ST, II-II, q. 83, a. 14, cor.

11) *Ibid.*

12) *Ibid.*

13) *Ibid.*

14) Cf. ST, II-II, q. 83, prol.; a. 1.

神に願うという行為が何らかの結果を求めてのことであるのは明らかである。そしてその原因としてはたらきを、理性が神に願うという行為によってなし得るかが論点となっている。トマスは「理すなわち理性には思弁理性と実践理性とがあり、思弁理性はものごとを把握するのみであるが、実践理性は把握するだけでなく、原因となるということが違っている」¹⁵⁾と論じ、実践理性が何らかの結果の原因になり得ることから、神に願うという行為が理性のはたらきであり得ることを主張する。

そして実践理性は、理性に従属しているもの、つまり理性の下位の諸能力、身体、そして配下、臣下などの従属する人間に命令を発することで原因となる場合と、自分に従属していない人間、つまり対等の者たちや上位の者たちに願うことで原因になる場合とがある¹⁶⁾。それゆえに願うということは理性に関わり、かくて「我らが今語るところの祈りは、理性のはたらきであること明白である」¹⁷⁾。

しかしながらトマスの議論は、祈りを理性のはたらきとしながら、そこに意志が、延いては愛徳が関わってくるにも触れる。「……意志は、理性をその終極へと動かす。それゆえに意志が動かすならば、理性のはたらきが愛徳の終極、すなわち神との合一へと向かうのを妨げるものは何もない。ところで祈りは愛徳のもとの意志に動かされている限り神へと向かう……彼は祈る相手に近づかねばならない。あるいは人間に対するように場所において、あるいは神に対するように精神において……ダマスケヌスもこう言っている。「祈りは知性が神に昇っていくこと」と」¹⁸⁾。

ここで言う知性の神への上昇、あるいは精神の神への上昇は、神に対する恒久的な態度と解し得る愛徳とは区別されている¹⁹⁾。「人間の精神は、[人間の]本性の弱さのために、長い間高みに立ち続けることができない。人間の弱さという重みのため、霊魂は下位のものの方へ押し下げられる。

15) ST, II-II, q. 83, a. 1, cor.

16) Cf. *ibid.*

17) *Ibid.*

18) ST, II-II, q. 83, a. 1, ad2.

19) Caietanus は、愛徳による神との合一を共通の合一性あるいは一般的な合一性であり、一方、祈りによる合一性を実体的な合一性であるとし、区別している。Cf. Caietanus (1897), p. 193, "Nota...quod oratio duplicem ex parte petentis unitatem requirit ad Deum. Alteram communem et haec est unitas amicitiae, quam facit caritas ... Alteram substantialem, quam facit ipsa oratio: et haec est unitas applicationis, qua mens seipsam et sua exhibet Deo in famulatu et cultu affectuum, precum, meditationum et exteriorum actionum".

そして、それゆえに、祈る者の精神は神へと、観想によって上昇する時、何らかの弱さのためにすぐに逸れてしまうということが起きる」²⁰⁾。ここで神への上昇を起こすとされている祈りは観想を伴う祈りであり、したがって個別具体的な祈りの行為であると解し得る。そしてそれによって起きる神への上昇は、人間の自然本性の弱さのために集中が途切れることで続かなくなるものとされる。

この集中と祈りおよび愛徳との関係に関しては次のような議論がある。祈りには、人間を神に対して功德あるものにするというはたらきがあり、これは愛徳に形相づけられたはたらきすべてに共通する。このためには祈る間中常に集中している必要はなく、祈りを始める最初の意図の際、集中していればよいとされる。また、希求して得るという祈り固有のはたらきにも、最初の集中だけで十分とされる²¹⁾。したがって、これらのはたらきのいずれに関しても、祈りと知性ないし精神の神への上昇という状態とは区別されている。

またトマスは祈りの身体性に注目する。祈りによって人間の精神は神に昇るべきだが、声は神の観想という上昇から引き離すという異論²²⁾を挙げた上でこう述べる。「……声による祈りは、いわば義務を果たすということに結び付けられている。すなわち人間は神に、神からいただいているものすべてによって、すなわち精神だけでなく身体までも用いて仕えなければならぬ。特に祈りにこれらのことが適うのは、祈りを十全なものにするからである」²³⁾。

もっとも声に出して祈るということを初め、身体を祈りに用いるということは、「祈る人の精神、あるいは他の人の精神を、神の方へとかきためるためになされる」²⁴⁾ものであって、「……声と、同種のしるしとは、精神を内的にかきためるのに役立つだけ、用いるべきである。しかし精神が、このことで散らされ、あるいはどのような仕方であれ妨げられるなら、そのようなことはやめるべきである」²⁵⁾とされる。

またトマスは祈りに集中が不可欠である場面についても言及している。

20) ST, II-II, q. 83, a. 13, ad2.

21) Cf. ST, II-II, q. 83, a. 14.

22) Cf. ST, II-II, q. 83, a. 12, ob2.

23) ST, II-II, q. 83, a. 12, cor.

24) ST, II-II, q. 83, a. 12, ad2.

25) ST, II-II, q. 83, a. 12, cor.

トマスは祈りの成果を功德ある者になること、こいねがって得ることと挙げた上でこう述べる。「祈りの第3の成果は自らなすところのもの、すなわち精神のある種の靈的な回復である。そしてこのためには祈りの際、集中が必然的に求められる。それゆえに……こう言われる。「私が祈るのが舌の上のことなら、私の精神には実りが無い」²⁶⁾。ゆえに精神の神への上昇をもたらす集中は、精神の靈的な回復と言うべきものに関しては不可欠であり、集中がなければ祈りのこの成果はあり得ないということになる。

『神学大全』での祈り論をまとめると、本来の祈りは、個別具体的な行為としての祈りである。確かに、信仰、希望、愛徳のゆえに持続する希求によって、人間が常に祈ると言える事態は見落とされてはいないが、本来的な祈りの位置に据えられているのは、個別具体的な行為としての祈りである。

祈る際の集中によって知性ないし精神の神への上昇が伴い得るが、これは願う行為としての祈りには祈っている間中必要なものでなく、祈りの最初、神に願う際には不可欠だが、祈っている最中に集中が途切れたとしても祈っていないことにはならない。

しかし一方では、精神の靈的な回復のためには集中が、延いてはそれによってもたらされる神への知性ないし精神の上昇が不可欠である。声をを用いるなどの祈りの身体性も強調されており、知性ないし精神の上昇の助けとなるのが身体の役割として期待されることになる²⁷⁾。

第2章 敬神の徳のはたらきとしての祈り

敬神 *religio* とは、神にしかるべき尊崇を捧げるという徳である²⁸⁾が、このような尊崇は神にとっては当然受けてしかるべきものである。ゆえに、各人に各人のものを帰せしめる徳である正義の徳の部分的徳であるとされる²⁹⁾。そして祈るということは、神に敬意を表し名誉を帰することでもあるのだから、それは敬神のはたらきであるとトマスは論じる。

26) ST, II-II, q. 83, a. 13. cor.

27) 身体性を伴う個別具体的な祈りとなると稲垣 (1991) で挙げられているような「祈りを、神的事柄についての冥想、愛における神との一致、あるいは観想 *contemplatio* における神との全き合一などと同一視しようとする、いわば敬虔主義的な祈りの神学」における祈りとはまったく違うものとなる。Cf. 稲垣 (1991), p.514.

28) Cf. ST, II-II, q. 81, a. 4.

29) Cf. ST, II-II, q. 80, a. 1.

「祈ることで人間は神に敬意を表す。すなわち彼〔神〕に従属する。また彼〔神〕に祈ることで、彼〔神〕を、その善の作り手 *auctor suorum bonorum* として必要としていることをはっきり申し出る限り。それゆえ明らかに、祈りとは敬神のはたらきである」³⁰⁾。

前節で述べたように、願うということは対等の者、ないしは上位者、すなわちおのれの権限には服していない者に対し、何らかの結果を求めるということであり³¹⁾、そうすることは既に、願う相手の下に身を置くことの表明である³²⁾。祈りにおいて、願う相手は神である。ゆえに祈るということは、神に従属することにほかならない。この従属を認めることが、神に敬意を表するということである。

祈りにおける神への従属について、トマスは言う。「祈ることで人間はその精神を神へとゆだね、それ〔精神〕を、敬意を通して神に従属させ、なんらかの仕方ですし出す」³³⁾。すなわち、神に敬意を表するという従属は、神に対し精神を捧げるという意味での従属である³⁴⁾。そしてこの時、神は単なる上位者ではなく善の作り手、すなわち、我々に関わってきて善をもたらす神として精神を捧げられる。

善をもたらすということについて言えば、神は創造者 *creator* として、摂理を以て統べる者 *providens* として、人類の贖い主 *redemptor* として善の作り手であると考えることができる³⁵⁾。すなわち善の作り手としての神が必要であることを表明する時、祈る者は被造物として創造主を必要とする³⁶⁾ことを表明し、摂理を以て統べられる者として摂理を以て統べる

30) ST, II-II, q. 83, a. 2. cor.

31) Cf. ST, II-II, q. 83, a. 1. cor.

32) 願うということは願う相手の力を必要とし願う相手の下に身を置く構造があると解することができる。Cf. Caietanus (1897), p. 195, "Nam ipse actus petendi est actus subiectionis et professionis virtutis: qui enim petit ab aliquo, indiget illo, ac per hoc se subiicit illi petendo".

33) ST, II-II, q. 83, a. 3, ad3.

34) Cf. 稲垣 (1991), p. 515.

35) Cf. Caietanus (1897), p. 195, "...propter hoc petitio seu oratio ponitur actus religionis, cuius est honorem Deo exhibere. Honoramus siquidem Deum petendo: et tanto magis quanto, vel ex modo petendi vel re petita, profitemur ipsum esse supra omnia, creatorem, providensorem, redemptorem, etc. Et hoc est quod Actor intendit in corpore articuli". Caietanus は主文で、*auctor suorum bonorum* と表現されているものに、*creator* だけでなく、*providens*, *redemptor* という面をも読み込み、「これぞ著者が、項の主文で意図したことだ」とまで述べている。

者を必要とすることを表明し、罪人として贖い主、あるいは救い主を必要とすることを表明する、ということになる。被造物は創造主に対して、摂理を以て統べられる者は摂理を以て統べる者に、罪人は救い主に対して、無に等しいものとして全面的に依存している。すなわち神に祈るということは、神の前に己の無力をさらけ出し、真に力があるのは神であると表明することに他ならない³⁷⁾。

しかしながら神が摂理を以て統べるということを読み起こす時、すべてが摂理によって定められているのなら神に何かを願い祈るということに果たして意味があるのかということが問題になる。『神学大全』では次のような異論が取り上げられている。「祈りによって祈られるものの精神は、彼に願われていることが起きるよう変えられる。しかるに神の精神は不動であり、不可変である……それゆえに我らが神に祈るということ是不適切である」³⁸⁾。

この疑問に対してトマスはこう答える。「……神の摂理によってはどのような結果が生じるかということだけではなく、どのような原因によって、そしてどのような秩序によってことが成り行くかということもまた準備される。またほかの〔神以外の〕原因のうちには……人間の行動もある。それゆえに、人間たちが何らかのことは行なうというのは、その行動によって神による準備を変えるためではなく、その行動によって、神により整えられた秩序にしたがって何らかの結果を実現するためでなくてはならない。……そして祈りについてもまた同様である。すなわち我らは神による準備を変えるために祈るのではなく、神が諸聖人の祈りを通して実現すべく準備したことを達成するために祈るのである。すなわち人間たちが要請することによって、全能の神が世々に先立って彼らに贈るよう整えていたものを受け取るに値するものとなるように」³⁹⁾。

36) なお、稲垣 (1991) はレリギオすなわち敬神のような宗教的態度を徳として捉える認識を可能にする哲学的前提として、神と人間との間の創造主-被造物関係を取り上げる。Cf. 稲垣 (1991), pp.506-7.

37) Cf. 稲垣 (1991), p.515. 「請い求めとしての祈りにおいて神に捧げられるのは、神なしには自らが無であることを告白し、自らをへり下らせ、神に全く従属させる「砕かれた霊」にほかならない」。

38) ST, II-II, q. 83, a. 2, ob. 2.

39) ST, II-II, q. 83, a. 2, cor. 摂理と自由の間の緊張関係について、ある者は、人間の意志が本来の意味の自己原因ではなく、神に動かされているとしても、自己の行為の最近接の原因であり、その意味で行為の責任を問われると論じる。Cf. 脇 (1999), p.183. また摂理に関わりを持つ神の予知については、神が未来に偶然起きることを知る認識自体は必

すなわち摂理によって祈りを含む人間の行動すべては統べられており、それがすべての結果を起こす手順あるいは準備に神によって組み込まれている。それゆえ人間は祈りによって神の意志を変えようとするのではなく、神が準備したことを実現するために祈るのである。これは、摂理を以て統べる者としての神の意志に自らの精神を従属させることである⁴⁰⁾。

第3章 希望とともにある祈り

それでは神に自らを従属させた人間は、神に何を祈るべきなのであるか。この点について『神学大全』にはこうある。「祈りはある意味では、私たちの希求の解釈者 *interpres apud Deum* である。正しく祈ることによってのみ、我らは正しく希求するものを願う。そして主の祈りでは、我らが正しく希求できているものがすべて願われるのみならず、それらが希求されるべき順序で願われている」⁴¹⁾。

『神学綱要』でもまた、主の祈りが人間の希求すべきことを示すものと位置付けられており⁴²⁾、そして『神学大全』、『神学綱要』ともに、主の祈りは、神に至福 *beatitudo* を願うことを教えるとするが、『神学大全』では祈りが正義の部分的徳である敬神のはたらきとされ、また愛徳とも関係づけられていた⁴³⁾のに対し、『神学綱要』では「これ〔祈りの形式〕によって我々の希望は最高に高められる。我々が何を彼〔神〕に望むべきかを神御自身に教え尽くされるからである」⁴⁴⁾とされているように対神徳の1つである希望と関係づけられている。

希望は救いを求めて神に希望をかける徳であり、その意味で自分のために何かを欲する徳、愛徳と比較してみるなら不完全な欲情的な愛であるとすらされる徳である⁴⁵⁾。一方、正義は各人に各人のものを帰せしめるという公平さの徳であり、他者に関わる徳であると特に言及される⁴⁶⁾。愛徳もまた、友に善があるように欲するという善意 *benevolentia* を伴う、神に

然的だが、神が知っているということは未来にその出来事が起きることの原因ではない、という理解もある。Cf. 小倉 (2002 年), p.97.

40) Cf. 稲垣 (1991), p.518-19.

41) ST, II-II, q. 83, a.9, cor.

42) 註2 参照。

43) 註4 参照。

44) CT, II, c. 3.

45) Cf. 稲垣 (1993), p.12.

46) Cf. ST, II-II, q. 83, a. 2.

対する真正の友情 *amicitia honesti* であり、利益ゆえの友情 *amicitia utilis* や快樂ゆえの友情 *amicitia delectabilis* のような自分のための友情とは異なるものとされる⁴⁷⁾。

したがって『神学大全』での祈りに関する議論は、脱自性、神中心性を有する徳と祈りを関連付けるものであるということになる。そして確かに、第2章で確認した『神学大全』での祈り論は、祈りそのものが摂理による秩序に組み込まれ、人間は神に祈りを捧げることで神に従属し、神が祈りによって実現することを望んでいる事柄を祈らなければならないということに重点を置いていると解し得る。

『神学綱要』でも神の示した主の祈りに従って人間は祈るべきであるとされており、また「……神の意志は、人間の言葉で先には欲していなかったことを欲するようには変えられない……しかし神から〔何かを〕得るためには祈りが、祈っている当人のために不可欠である。すなわち自分で自分の不足を考え、自分の精神を、祈りによって得ることを望むものを熱心かつ敬虔に欲するようには変えるために。というのもこうすることで〔望むものを〕受け取るのに相応しい者となるのであるから」⁴⁸⁾と述べられているように、神への従属、摂理の中での祈りという視点は見落とされてはいない。

だがおのおののものには自然本性的に欲する善があり、それを得ることで人間もまた完成する⁴⁹⁾。この完成が至福であり、希求の終息という点に関して言うなら平和と呼ばれる⁵⁰⁾。希望の徳は、この至福ないし平和への希望であり、救いへの希望である。ゆえに、『神学綱要』の祈り論は、祈りによって人間が摂理の中に位置づけられるという面だけでなく、祈りが至福の状態へと自己を変容させることへの希求であるという面をも浮き上がらせるものと解し得る。

『神学綱要』第2部は希望について論じており、主の祈りの解釈を方法の1つとして採用している。しかし執筆が途絶しており、「天におられる我らの父よ、あなたの名が聖とされますように、あなたの国が来ますように」という1つの呼びかけと2つの願いまでしか、それも「あなたの国が来ますように」は途中までしか論じられていない⁵¹⁾。

47) Cf. ST, II-II, q. 23, a. 1, ob. 3; ad3.

48) CT, II, c. 2.

49) Cf. CT, II, c. 9.

50) Cf. Ibid.

人間の自然本性は神の恵みにより自然本性を超えて完成するが、「これ〔恵みの完成〕によって〔人間は〕神性と同じ生まれのものとなる……このような霊的再生により人間は、神により高い希望をかけることが相応しいものとなる。すなわち永遠の遺産を手に入れるという希望を……そして私たちが受け容れてきた「養子を取る霊」によって、我々は……「アッバ、父よ」と叫ぶ」⁵²⁾。すなわち至福を求める希望の下で祈る者は、霊的再生により「神性と同じ生まれ」のものとして神の「養子」となり、子として神に「父よ」と呼びかけなければならない。「ところで、なかなしく自分が神の子であると気付いている者は特に愛という点で主に倣わなければならない……そして神の愛は私的なものではなく、すべての人に共通である」⁵³⁾ので、人間は祈りに際して「私の父よ」と呼ばず、「我らの父よ」と呼ばねばならない⁵⁴⁾。そして神は、摂理を通しすべてを支配しており、願いを叶える力を持っているという点では最も確実に信頼できるので、「天におられる」と言わねばならない⁵⁵⁾。

かくて人間は祈る時、霊的再生によって神との間にある種の同質性を得たものとして、摂理の確実性を確信しつつ祈らねばならないというのが「天におられる我らの父よ」という呼びかけの言葉の趣旨だということになる。

次いで「あなたの名が聖とされるように」という願いについては以下のように考察される。「あたかも主の名が聖でないから願うというのではなく、すべての人によって聖とされるように、すなわち神が知られて、何かが〔神〕より聖であると看做されることのないようにということである。一方、神の聖性が人間たちにはっきりする証拠のうち、最も明白なものは人間の聖性である。彼〔人間〕は神がうちに住まうことによって聖となる」⁵⁶⁾。すなわち神は常に聖であり、聖でないものが聖であるように祈る

51) Cf. CT, II, c. 10.

52) CT, II, c. 4. Cf. Murray (2010), p. 22, "Adopted now as sons and daughters of the one Father, we are able, Thomas tells us, to live our lives in the hope of an eternal inheritance".

53) CT, II, c. 5.

54) Torrell は、「我らの父」という呼びかけを、孤立した個人としてではなく 1 つの心で祈るということにつなぎ、さらにはお互いに交わり助け合うという共同体性にまで広げていく。Cf. Torrell (2011), p. 73. また、Torrell の当該箇所での議論には、共通善への言及はないが、稲垣 (1961)、は、共通善としての神を至福者の共同体の最も深い基礎づけとしている。Cf. 稲垣 (1961), p. 51.

55) Cf. CT, II, c. 6.

のではない。すべての人が、神が聖であることを認識するように祈るとい
うのが、主の名が聖であるように願う祈りである。

そして人間の聖性が神の聖性の最も明白なしるしであるとは、神を知ら
なかった人にとって神の聖性を知る証拠になるという意味であり、それを
証拠として受け入れた人々が神を認めるようになるということまで含意
されていると考えられる⁵⁷⁾。

「天におられる我らの父よ」と「あなたの名が聖とされますように」と
の解釈では、神の子となって祈ること、そして神がうちに住まうこ
とによって聖となり、神の聖性を示すしるしとなるということが言及され
た。これは人間が至福での完成をこの地上においてもすでに始めていると
いうことであり、祈りが変容への希求であるという面が浮き上がって見え
てくる。

次いで「あなたの国が来ますように」という願いについての『神学綱
要』での解釈を見ていく。『神学大全』では「我らは彼〔神〕の国の栄光
に到達することを願う」とのみ解説されているが、『神学綱要』でも一致
して次のように言われる。「神の栄光を求め願う思いの後に続くのは、人
間が神の栄光に与る者となることを願い求めることである。そしてそれゆ
え第2の願いはこうなる。「あなたの国が来るように⁵⁸⁾」。そして神の国
の栄光への到達、すなわち至福は「……知ることと愛することによって
精神が神に〔神〕御自身によって内属することにある⁵⁹⁾」と解説される。

人間の知性認識は形象を通してのものであるが、下位のもの形象によ
って上位のものを認識することはできないので、人間は被造物を通して神
を認識することはできず、また神の形象を形成して神を認識することもで
きない⁶⁰⁾。人間の形象は、1つのものについても多くの形象の組み合わせ
として認識するが、そのような仕方では、一性そのものである神を認識す
ることはできないからである⁶¹⁾。

56) CT, II, c. 8.

57) この願いについてはSTでも、神の名が聖とされる願いは人間たちの間に神の栄
光が広まっていくことを求めるものだという考察がなされている。Cf. ST, II-II, q. 83, a9.
adl.

58) CT, II, c. 9.

59) Ibid.

60) Cf. ibid.

61) Cf. ibid.

「したがって〔結論として〕残るのは、神がその本質によって被造の知性に視られるためには神の本質そのものがそれ自体として、他の形象によってではなく視られる、詳しく言うと被造の知性の神へのある種の合一によって視られるのでなければならないということである……また神の本質だけがこうなるのだが、知性がどんな類似もなしにそれ〔神の本質〕と一つになり得るとするのは、神の本質そのものがその存在でもあるからである。このことはどのような他のものの形相にも当てはまらない……そうであるならばまさに神の直視を通して、至福なる精神は理解するはたらきのうちに神と一つになる」⁶²⁾。

存在そのものである神に人間が内属することで、人間は神と一つになり、ゆえに形象を通さずに神を認識することが可能となる。これが神を直視するということであり、直視という語が使われているが、人間が人間の力で見ているのではない。

「……何か別のものに包含されているものは、全体がそれに含まれているが、被造の知性が神の本質を全体としてみることに、すなわち十全かつ完全な仕方での神の直視に至るといふようなことはあり得ないからである、つまり神を視るといふのは見える限りで視るといふことで、神が見えるといふことは彼〔神〕の真理の明白さによる」⁶³⁾。

すなわち神は真理であるがゆえに本来明白であるが、その明白さのもとで人間に見える限りの直視しか人間はなし得ない。しかしそれでもこの直視には喜びが伴う。神の本質は善であり愛をかきたてるがゆえに、愛の大きさに比例して大きな喜びを得ることになるからである⁶⁴⁾。

上記のように「あなたの国が来ますように」という願いについての『神学綱要』での考察では、祈りによって希求される至福が喜びをもたらしということまで言及される。そしてこの神の直視による喜びは、神すなわち存在そのものに人間が内属することによってもたらされる。ここでも単なる神への従属への言及を超えて、祈る者が神への内属による自己変容を希

62) Ibid.

63) Ibid.

64) Cf. *ibid.*

求めているという捉え方の反映を見出すことができるだろう。

以上論じてきたように、『神学綱要』における祈り論は、祈りを希望の徳とともに論じることで、至福へと向かう上昇的な自己変容への希求に、より重点をおくものであると解釈できる。

結 語

本稿では『神学大全』と『神学綱要』の祈りに関する議論を追ってきた。

第1章では『神学大全』での祈りの議論に基づき、トマスが考察している祈りとはどのようなものであるかを、能う限り文言上の根拠を挙げつつ見直した。そしてトマスが考察している祈りは、あらゆる行動の背後にある根本態度としての祈りのようなものではなく、声を初めとした身体的な行為をも伴い得る、個別具体的な、神に願う行為であるという理解を得た。

第2章では『神学大全』での祈りの議論に基づき、正義の部分である敬神の徳のはたらきとしての祈りについて考察した。そして神に祈ること、すなわち神に何かを願うことは、善の作り手としての神に敬意を表し従属すること、すなわち創造主、摂理を以て統べる者、救い主としての神への従属であると考えられるという理解を得た。

第3章では『神学大全』での主の祈りの解釈と『神学綱要』での主の祈りの解釈とで素材が共通する部分を比較した。そして『神学大全』は神への従属に比較的焦点を置いているのに対し、『神学綱要』では祈りによって、神との同質性や聖性、存在そのものへの内属とその喜びなど、ある種の変容が祈る者にもたらされるという点に比較的焦点が置かれているという理解の可能性に言及するに至った。

以上の議論を総合するなら、『神学大全』および『神学綱要』での祈り論は併せ読むことで、祈りというものに違った角度から光を当て、立体的に捉える視座を得る可能性に言及することは許されると思われる。そのように立体的にとらえた結果、トマス・アクィナスの祈り概念は、愛徳および敬神の徳とともにある脱自性と、希望の徳とともにある上昇的な自己変容への希求を兼ね備えた、神との交わり⁶⁵⁾の個別具体的な契機⁶⁶⁾だということ、1つの理解として提示することができる。そし

65) ここでいう交わりは、存在そのもの ipsum esse に対する本来の関係に立ち返ることである。Cf. 山田 (1979), pp.374-81; 保井 (2010), pp.59-61; 稲垣 (2009), pp.26-28。

66) Cf. CT, II, c. 2.

て、これは、自己を超えて神に従属することで、自己を完成させるという人間の根本的なありよう⁶⁷⁾に合致する。

最後に『神学綱要』を巡る問題の1つである執筆時期について、祈り論に注目しての見通し、ならびに両著作での祈り論の相違と両著作の構造の相違との関連についての見通しを述べる。

トマスの祈り論は『神学大全』においては正義の徳との関連から摂理の中に人間を位置づけるという点に重点を置いているのに対し、『神学綱要』では摂理の中で祈りに言及しつつ、希望の徳との関連から人間の上昇的な自己変容への希求である点に重点を置いていた。したがって『神学綱要』での祈り論は、『神学大全』での祈り論を踏まえた上で『神学大全』での祈り論では中心にならなかった側面に重点をおいた議論であるとも解釈できる⁶⁸⁾。ゆえに少なくとも『神学綱要』第2部は『神学大全』の第2部よりも後の執筆であると想像される。

『神学綱要』の執筆時期に関しては、Torrellによれば次の3通りの説がある⁶⁹⁾。

- ① 『神学綱要』が第2部で未完のまま途絶している点に着目しトマス絶筆直前の1272-73年とする説
- ② 議論が『対異教徒大全』と類似しているという点に着目し『対異教徒大全』の執筆後の1265-67年とする説
- ③ 上2説を折衷し、第1部の執筆時期を1265-67年、第2部の執筆時期を1272-73年とする説

祈り論に着目する限り①あるいは③の説を採用ことになる。さらに個人的見解を述べるなら、議論の類似性が指摘されていることを考える限り③の説が、執筆時期隔絶の理由が想像の域を出ないという難点があるものの最も証拠に即した見通しと言えるだろう。もちろんこれは成り立ち得る見通しを示したのみであって、さらなる研究を必要とするものである。

次いで両著作での祈り論の相違と両著作の構造の相違との関連についての見通しを述べる。『神学綱要』の信仰論には創造論とキリスト論とが含まれており、キリスト論の中で人間の墮罪と救済、最後の審判までが論じられている。すなわち、『神学綱要』の信仰論の中には『神学大全』の神

67) Cf. 稲垣 (1991), p.519; 稲垣 (2009), pp.26-27.

68) なお、STの祈り論でトマスが希望に言及するのはただ1か所、それもアウグスティヌスからの引用中に名前が挙がるに過ぎない。Cf. ST, II-II, q. 83, a. 14, cor.

69) Cf. Torrell (1996), p. 164.

論に始まり、キリスト論で神へと帰って行く構造が、人間の徳についての詳細な議論を飛ばす形で包含されている。そして祈り論は『神学大全』では上記の過程の途中、人間論中の徳論の一部であり、一方『神学綱要』では神に創造されキリストを通して神へと帰る議論が展開された後に、神に祈り求めるべき救済を論じる中で祈り論が展開する。

ゆえに『神学大全』で祈りは、被造物である人間が創造者である神に従属すべきであるという観点からもっぱら論じられることになったが、『神学綱要』では神に求めるべき救済とは何か、そこで人間はどのように変わることを祈るべきかという観点から論じられることになったと考えられる。

本稿では祈り概念に違いを想定しても読みが破綻しないということを確認し、両著作で祈り論の重点の置き方に違いがあるというのは可能な解釈であることを論じた。そしてそれは上述のように両著作の構造全体から来るとするのが、現時点での見通しである。

文献表

テキスト

1. Thomas Aquinas, *Summa Theologiae, Pars IIa IIae*, Marietti, 1962.
2. Thomas Aquinas, *Compendium Theologiae, in: Opuscula Theologica vol. 1*, Marietti, 1954.
3. Thomas Aquinas, *Compendium of Theology*, translated by Richard J. Regan, Oxford University Press, New York, 2009.
4. Thomas von Aquin, *Compendium Theologiae, Grundriß der Glaubenslehre, deutsch-lateinisch*, übersetzt von Hans Louis Fäh, herausgegeben Von Rudolf Tannhof, Heidelberg, 1962.

参考文献

1. 稲垣良典「トマスのレリギオ概念」(トマス・アクィナス『神学大全』第19冊(創文社, 1991年), pp.503-21)。
2. Jean-Pierre Torrell, O. P., *Christ and Spirituality in St. Thomas Aquinas*, translated by Bernhard Blackenhorn, O. P., The Catholic University of America Press, Washington, D. C., 2011.
3. Paul Murray, O.P., *Praying with Confidence, Aquinas on the Lord's Prayer*, Continuum, 2010.
4. 小倉瞳子「神の予知の必然性と未来のものごとの偶然性について——トマス・アクィナス『神学大全』I, q. 14, a. 13を中心に」, 『中世思想研究』(中世哲学会), 第46号, 2002年, pp.89-100。

5. 松根伸治「トマスにおける実践知の構造——思慮と行為の重層性」, 『中世思想研究』(中世哲学会), 第 47 号, 2003 年, pp.110-21。
6. 山田晶「トマスの《enuntiabile》に関する一考察—— Sum. Theol. I, q. 14, a. 15, ad3」, 『中世思想研究』(中世哲学会), 第 16 号, 1974 年, pp.89-105。
7. 稲垣良典「存在と類比——「経験」の論理としての類比」, 『中世思想研究』(中世哲学会), 第 11 号, 1969 年, pp.40-58。
8. 稲垣良典「トマス倫理学における至福」, 『中世思想研究』(中世哲学会), 第 35 号, 1993 年, pp.1-20。
9. Jean-Pierre Torrell, O. P., *Saint Thomas Aquinas, vol. 1: The Person and His Work*, translated by Robert Royal, Washington, D. C., 1996.
10. 村上武子「聖トマス・アクィナスによる人間の自由性について」, 『中世思想研究』(中世哲学会), 第 10 号, 1968 年, pp.64-86。
11. 脇宏行「神の摂理と人間の自由」, 上智大学中世思想研究所編『中世研究』, 第 11 号, 創文社, 1999 年, pp.171-88。
12. 保井亮人「トマス・アクィナス『ヨハネ福音書講解』における神の世界内在について」, 『中世思想研究』(中世哲学会), 第 52 号, 2010 年, pp.49-61。
13. Caietanus, Commentaria Cardinalis Caietani, in: *Secunda secundae Summae theologiae ad codices manuscriptos Vaticanos exacta cum commentariis Thomae de Vio Caietani Ordiniis Praedicatorum, S. R. E. Cardinalis cura et studio Fratrum eiusdem Ordinis, Opera omnia iussu impensaue Leonis XIII P.M. edita Sancti Thomae Aquinatis, tomus 9*, Roma, 1897.
14. 山田晶『トマス・アクィナスの《エッセ》研究』, 創文社, 1978 年。
15. 稲垣良典『人格《ペルソナ》の哲学』, 創文社, 2009 年。
16. 稲垣良典『トマス・アクィナスの共通善思想』, 有斐閣, 1961 年。
17. 奥村一郎『祈り』, 女子パウロ会, 1975 年。